杉山平一氏の書斎　1

今村欣史

２０１５年３月８日（日）曇り。
中山寺の杉山平一氏の書斎を訪問した。
その時のリポート（日記のようなもの）があるので、少し整理してここに残しておこう。

☆　☆

杉山平一氏が90歳を超えられたころ、わたしが畏敬する宮崎修二朗翁から言われたことがある。
「もうそんなに長くお元気ではおられませんよ。今のうちに書斎をお訪ねしてお話をなさっておきなさい」と。

※ このあと、杉山平一氏のことを「氏」ではなく、「先生」と書く。

わたしは果たさなかった。お忙しくされているだろう杉山先生を若輩者のわたしがお邪魔することに遠慮があった。
それから何年かして思いがけず、わたしの店「喫茶・輪」にご来店くださったのである。うれしくありがたいことだった。
しかし、来て頂くのと訪問するのとでは大いに違う。その後もなにか忘れものをしているような気がしていた。

☆　☆

先生がお亡くなりになったのは、ご来店くださった半年後のことだった。ご生前にはついに訪問出来なかったのだ。
それを今日、果たしてきた。
ご息女の木股初美さんにご無理をお願いして案内して頂いた。
「書斎を他人に見られることは恥ずかしいことだ」となにかに書いておられたその書斎に。少しの後ろめたさをもって。
中山観音駅で初美さんと待ち合わせて、案内して頂いたのだが、想像通りの坂道だった。
途中、新興地のような街並みに小ぎれいな家が並んでいる。初美さんの話では、「昔は大邸宅があったのですが、後に分筆されて多くの住宅になりました」とのこと。それで景観が全く変わってしまったという。
「あちこちのお庭に桜の木があって、いい景色だったのですがねえ」と。そういえば道端に大きな桜の木が何本か。これは公道なので残ったということか。
ずっと坂が続く。特に、先生の家に近づいた辺りは急坂になっていて大変な所だった。胸突き八丁という感じ。わたしでも息切れがする。

ここを先生は高齢になってからも朝晩歩かれたのだ。

「なんていうことない」と言っておられたという。それが健康法だったのかもしれない。
長身の先生が背を丸めて懸命に坂道を上がる姿が目に浮かぶ。
門柱に「杉山」と味な文字の表札がある。先生自ら書かれたものだろう。
「訪問」という詩を思い起こす。

「訪問」

門のボタンを押すと
ベルが鳴ったらしい
玄関の電気がついて
どなたですか　と声がした
とたんに犬が吠え出し
（略）
轟然と飛行機が一機
頭上を過ぎた
僕は深く呼吸をととのえて
言った
すぎやまと申すものですが

つづく